



Save The Earth

地球の温暖化について

私

達が目頃何気なしに使っている割り箸と、地球温暖化とは特に何の関係もないような気がします。しかし最近では地球温暖化防止活動の場において良く「マイ箸」「マイバック」などの言葉を耳にします。「マイ箸」運動とは、他所で食事をする時はたいていの場合割り箸を使って使い捨てが多いので、他所へも自分の箸を持ち歩いて使い捨てを止めようという運動です。以前は弁当を持って行く時は弁当用の箸を必ず一緒に持って行ったり、食堂へ行って洗って何回でも使えるような漆塗りの箸を箸立に備えてありました。ところが何時の頃からか自宅で食事する時以外は殆どの場合割り箸になってしまいました。隣組の寄り合いの時も会議の後の会食の場合も、またスーパーやコンビニで弁当を買った時にも割り箸が付いてきます。一寸した宴会の場合も洋食でない限り割り箸です。

割り箸は小さな木片だし、マッチの軸や爪楊枝、鉛筆の削り屑などど合わせても地球規模の環境に影響するような量にはならないだろうと思いがちですが、やはり「塵も積もれば…」数量的に計算された値を見ると、環境問題で取り上げられるのも成る程と思わざるを得ません。地球温暖化白書によれば現在私達が使っている量は年間250億膳、一人当たり208膳ということでした。

ところで日本人が箸を使い始めたのは随分昔のことです。古事記によると須佐之男命が旅の途中出雲の国肥の川の上流、鳥髪という所にさしかかった時、流れてくる箸を見て上流に人が住んでいる事を知ったという伝説があります。内容は神話時代のことであるとしても、その生活描写からして4〜8世紀頃に箸が使われるようになったと推定されています。ずっと後の明治時代に始まった木を原料とする割り箸は、当時材木として利用された杉や檜の端材や間伐材を有効に利用したものでした。だから何も環境問題にはなりません。ところが現在では膨大な量ののぼり材木が使い捨てされています。その材木も殆どは輸入に頼っているし、割り箸の99%は中国産だそうです。日本には杉や檜の間伐材は沢山あるはずですが、やはりコストの問題で人件費などで日本で5円かかるのが中国産は1〜1円50銭、たうです。それにうつくしくするた

めに漂白剤を使ったりしてあるので、あまり感心しないものがあります。前の号で黄砂について触れたことがありますが、黄河流域の森林の過剰伐採により砂漠化が進んでいるということでした。日本の割り箸文化と決して無縁ではないということになります。中国から輸入された割り箸といっても実際の木材の生産地はモンゴルやロシアにまでおよび、無計画に切られているので森林が破壊され洪水が多発しています。

森林の減少により二酸化炭素の吸収に影響すれば、割り箸と地球温暖化とは無縁ではありません。森林保護の観点から中国では日本への割り箸の輸出を停止しようと言う計画もあるようです。私達の割り箸文化もそろそろ見直さなければならぬ時期にきているのではないのでしょうか。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡 10

ひ びら じょう あこ

城

山の調査も、だいぶん進みましたが、その都度、測量機材一式と、杭木・飲料水や弁当等運び込みますから「やお、いかん」です。帰り道は、大汗をかいて水を浴びた様になります。でも、一級遺跡の日平城跡を調査できる喜びと気力が、下り坂の体力をカバーしています。一方で、益永浩仁さん(町教委)には脱帽です。今年四月から一緒に調査をしています。私よりも二十歳も若く、馬力があります。若さには勝てません。

【城山を測る】日平城跡の山頂から谷間への直線アタックは、帰りの登りが余りにきついので、新たなルートを確保しました。車が置けるIV郭から堀切3を北に進み、豎堀1を横切った後、山腹を斜めに下ります。城山の谷間は、IV郭との高低差が60m。ここから山頂を目指して、北東方向への登山となります。

直ぐに1番目の平場へ上がります。小山を造成したもので、幅6.5m、長さ16m、谷間との高低差は7m。平場から先の尾根は、長さ39mが緩傾

斜の下りになります。この内、端部は、長さ12mの凹地で、堀切の様な形をしています。平場と、この箇所の高差は5.2m。

問題はここからです。標高263mの地点から、尾根は一直線の急な登りに変化します。地面が固く、起伏が少ないので、足がかりもありません。これには、いつも泣かされます。

測量図面での直線距離は、長さ84m、これを登ると、やっと尾根が平らになります。2番目の平場です。標高306mの地点で、下の凹地との高低差は43m。この区間は、27度の急勾配である事が分かります。平場は、幅25〜6m、長さ16m。

平場から上位の尾根は再び、小山の様になります。標高312.2m、平場との高低差は5.8m。小山の真下に1本目の堀切があります。土塁もあつたと思われれますが、はっきりしません。

これから尾根は、幅4m程に括れて、標高318mまで延びています。注目すべき事は、この高低差6mの範囲に、土塁を伴う2本目のはっきり

した堀切がある事です。堀切は、中央部を浅く掘り残して、両側が豎堀の形をしています。土塁と堀切の高差は1m。その様子は、写真でご覧下さい。

さらに、尾根は城山で一番の急傾斜となつて頂上上がります。そこは城山の中心平場で、造成によって真つ平らになっています。標高は329.4m。2本目の堀切とは122mの高低差があります。測量図面での直線距離は、長さ14mですから、尾根の傾斜角度は、40度にもなります。【続く】



2本目の堀切と土塁

熊本県立装飾古墳館館長 大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

「古銭を表探」

山頂から手前に少し下った尾根で、益永さんが「文久永寶」の古銭を見つけてきました。「一瞬、牛乳のフタかな」と思ったそうです。

銅四文銭で、明治維新の5年前から、明治2年まで

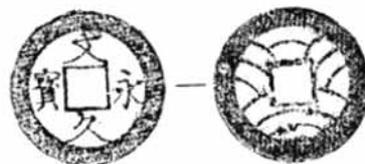
治維新の5年前から、明治2年まで製造された日本で最後の穴銭です。裏面に波状模様があります。

これに関連した事例が、天草市大矢野町の飛岳(天草五橋1号橋そば)

にあります。海が見渡せる所で、平成17年に烽火台跡と伝えられる山頂から23枚の古銭が表探されました。

内訳は、1枚が城山と同じ「文久永寶」で、他は全て「寛永通寶」でした。「航海の安全を願って、御参りする風習があつたかも知れない」と『大矢野町史』にあります。古銭は、お賽銭との解釈です。城山の場合は、どの様な理由でしょうか。城山でも、何かの祀りが行われたのでしょうか。

話題を提供する古銭です。



文久永寶